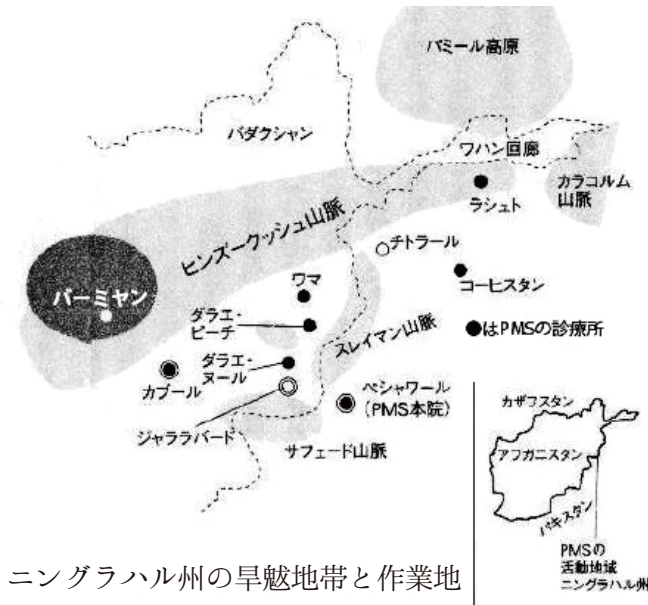


「一大作戦」

七月の段階では、WHO（世界保健機関）が主にコレラの大流行を警戒し、各地の井戸に消毒剤を入れていた。七月初旬に開かれたジャララバードでの地方会議では、「消毒剤配布達成率は百パーセントを超えた」との報告に私がいふかり、「達成率一八〇パーセントとはいかなる意味か」と尋ねたところ、WHOの地方所長が、明快に答えた。

「予想された錠剤の必要量に対して、水のある井戸が少ないので余っているということではありません。もう会議とてころではない。病気どころか、普通に生命を保つのが困難な事態に直面しています。」

摂氏五〇度に迫る酷暑と乾いた熱風の中で、これは切実な告白だった。八月の地方定例会の会議録は、普段なら長たらしい「今後の問題点」に「早魃！」一言、ふっきらぼうに書かれているだけであった。七月下旬、私の求めで、国連団体の調査による「ニングラハル州の早魃報告」がジア医師（PMS 副院長）から送付されてきた。ダラエ・ヌール渓谷だけが空白になっていたが、甚だしい被害とされた地図はソルフロット郡など四郡、数十数万家族に及ぶとされた。やはり診療所付近だけではなかったのだ。



それに驚いているところに、八月一日のラシウトの氷河崩落事件である。先に述べたわがPMS病院の混乱もあったので、急遽予定を変更して、八月中旬、私は再びペシャワールからアフガニスタンに入った。右往左往する現地に対して今後の方針を決定するためである。東部の各地域を実見した後、八月二十日、ジャララバードに「PMS水計画ジャララバード事務所」と称する緊急対策本部を置き、ここに本格的な活動が開始されたのである。事態はかなり緊迫の度を増したとみられた。みなが渇きの恐怖に怯え、流民化が既に始まっていた。後にはかなり修正されたが、以下が初期方針の骨子であった。

